

# 英語のビジョンを持たせよう

## ～何を身につけさせるべきか～

代々木ゼミナール英語講師

富田 一彦

本コラムは、富田一彦講師が広島県で英語教員向けに行った研修の一部を、WEBサイト用に書き起こしたものです。本コラムでは「学習者に英語全体に対するビジョンを与えることの大切さ」について述べた内容を一部抜粋しております。ぜひ、ご一読ください。

# 「英語全体に対するビジョン」

## 1. コンパクトで統一されている

---

---

私が思う英語のビジョンには、3つの特徴があります。

### 【英語のビジョン～3つの特徴～】

- (1) コンパクトで統一されている
- (2) 例外が少なく、あっても対処しやすい
- (3) 融通がきき、応用しやすい

まず、(1)からご説明しましょう。私はいつも自分の生徒に次のように説きます。

「確かに英語は受験科目で、諸君は今その勉強に苦勞している。でも英語は自然言語だから、アメリカに行けば5歳の子供でも英語を話している。つまり、英語というものは、5歳児の理解力と記憶力と判断力があればコントロールできるシステムだ。だから難しいはずもないし、覚えることもそんなに大量にあるはずもない。一つのことを知れば、それがかなり多くのことに利用できる。」

英語が「コンパクト」であるとは簡単に言えばこういったことです。ただし、このようにコンパクトなものとして扱うためには、「抽象化」という能力が不可欠です。この点については後ほど触れたいと思います。

# 「英語全体に対するビジョン」

## 2. 例外が少なく、あっても対処しやすい

---

---

### 【英語のビジョン～3つの特徴～】

- (1) コンパクトで統一されている
- (2) 例外が少なく、あっても対処しやすい
- (3) 融通がきき、応用しやすい

次に(2)ですが、ルールを厳密にすれば条件反射的に利用できるようになり、いちいち考えなくて済むから楽ですが、その反面、当てはまる範囲が狭すぎて使い勝手が悪く、結果的にルールだらけになってしまいます。逆に、その当てはまる範囲を広げようとし過ぎると、「なんでもあり」になってしまい、結果的にルールとしての意味をなさなくなります。

例えば学校の校則でも、「靴下は白に限る」と決めてしまえば白以外全部排除できますが、あまり厳密に適用すると、白っぽいが少し色がついているものや、洗濯のせいで黄ばんだものまで排除することになり、結果的に非常に窮屈です。

だからといって、「靴下の色は何でもいい」とすると、今度は完全に無秩序になって收拾がつかなくなります。そこで「靴下は、白ないしそれに準ずる淡い色に限る」とすれば、たしかに基準は多少曖昧ですが、ショッキングピンクは明らかに排除できるはずで、生徒側も「安全地帯」ではほとんど条件反射で行動でき、境界線に近い領域では、「立ち止まって考えること」が必要になります。

この「立ち止まって考えることが必要になる」ということが重要です。例えば先程の靴下の例では、クリーム色の靴下をはく生徒は「これは大丈夫なのだろうか」と考えるようになります。これが、生徒を賢くさせます。物事を正しく考えさせるためにはまず、教える側が適切なルールを彼らに与えなければなりません。この与えるルールと、例外との境界の匙加減は、先生方の腕にかかっています。教える側の勉強が必要であると考えるのは、主にこの部分です。

## 「英語全体に対するビジョン」

### 3. 融通がきき、応用しやすい

---

---

#### 【英語のビジョン～3つの特徴～】

- (1) コンパクトで統一されている
- (2) 例外が少なく、あっても対処しやすい
- (3) 融通がきき、応用しやすい

最後に(3)ですが、ここで取り上げるのが「抽象化」です。一つのことを覚えたら、それが数多くのことに使える方が有利であることは誰の目にも明らかですが、生徒はそのことを認識していないことが多いようです。

例えば品詞です。先生方は、「なぜ品詞を勉強するのか」と生徒に問われた時、なんとお答えでしょうか。ここであえて、こういう失敬千万な質問をさせていただくのは、生徒に同じ質問をすると、ばかばかしい答えが返ってくるのが少なくないからです。

そもそも、初期の授業で私が、「ここは前置詞だから後ろに来るのは名詞で」などと説明をすると、奇異な眼差しで見ている生徒がかなり見られます。つまり授業の中で、文法用語が使われることに慣れていないのです。昨今の英語教育の文法軽視は目に余るものがあります。いや、もしかするとこれまで正しい意味での文法教育が行われたことはない、と言ってもいいかもしれません。

もし生徒が“for”の意味をあるだけ覚える、というようなことを「文法」と錯覚しているようでは、文法は教えられていないといえるでしょう。単なる無秩序な結果を与えられることに意味を感じられるはずはない、という点で、過去の文法教育を否定する気持ちは分からなくはありません。しかし、文法否定論者はともすれば、正しい文法を教わった経験がないから、そのようなことを言うのではないのでしょうか。本来、文法を無視して語学教育は成り立ちません。

先程の質問に戻ります。「なぜ品詞を勉強するのか」という生徒の問いに、先生方はなんとお答えでしょうか。私はこの時に「抽象化」という概念を紹介します。サルが人間になったのは、数多くのことを記憶できたからではありません。その証拠に、サルと人間の脳の容積は3%しか違いません。ではなぜ人間はサルとこうまで違うのか。それは、人間には「抽象化」の能力が備わっているからです。抽象化とは、表面が違って見

えるものの中に、中身の共通性を見出すことです。中身が共通なら、同じ扱いをすれば済みます。

つまり、一つのルールで多くのことが説明できる。この能力を手に入れたからこそ、ある種のサルは人間になったのです。例えば、おサルに「巖島神社」「どら焼き」「おばあさん」という3つの言葉を教えるとします。この3つの言葉には、一見何の共通性もありません。ですから、おサルはどこまで行ってもこの3つの言葉を「別々のもの」としてしか使えません。

しかし、人間には抽象化の能力があります。「巖島神社」「どら焼き」「おばあさん」には表面上何の共通点もありませんが、この3つは全て「モノの名前」という共通の性質を持っています。そこで「モノの名前」という性質を持つ言葉をひとまとめにして、「名詞」という名前をつけます。そうすれば、「巖島神社」の使い方を記憶すれば、「どら焼き」や「おばあさん」はおろか、それ以外の何百、何千、何万という名詞が一つのルールの下でコントロールできるようになります。ですから、品詞を理解するのが嫌だというのは、自分はおサルのままでもいい、人類に進化するの嫌だと言っているのと同じであると思います。

品詞の例に限らず、抽象化は物事を合理的・体系的に考える上で最も必要な概念です。高等学校までの学習は、極論すれば、この能力を身につけ、育てるためのものだと言っても過言ではないでしょう。

